

# 1 郡山に住み始めた人びと

## 一 縄文時代以前

一九四六（昭和二十一年）年、当時二十歳の相沢忠洋は、群馬県新田郡笠懸村（現・みどり市）の切通しの赤土（関東ローム層）の中から黒曜石の破片を発見した。火山の噴火が多く、人間が住めるような自然環境ではないと考えられていた、火山灰が積もってきた層で発見したのである。相沢はその三年後、この地層から今度は黒曜石で作られた石槍を見つけた。この発見によって縄文時代を遡る文化の存在が確実となった。いわゆる「岩宿の発見」である。

旧石器の存在が明らかになると、全国でこの時代の発見や発掘が相次ぎ、福島県でも、岩瀬郡鏡石町の成田遺跡で一九四七（昭和二十二年）年に発見されていたナイフ形石器や石刃が旧石器とわかり、一九五五（昭和三十一年）年に公表されている。

## 二 石の文化

日本の歴史で一番長かった旧石器時代は、今から約四万年前から、土器を使い始める約一万三〇〇〇年前までの間、およそ三万年間は続いた。この時代は最後の寒冷期後半にあたっていて、日本列島の年平均気温は五〜七度ほど低かったと推定されている。この気候は、現在の北海道網走市

付近と類似するとされ、今は絶滅したマンモスやナウマンゾウなどの大型ほ乳類が生きていた。

長い時代であるにもかかわらず、発見されるものや判明したことは決して多くはない。それは、木や骨あるいは皮製品などの有機質が、酸性の土壌によって分解されるからであり、旧石器時代の遺跡で出土するのはほとんどが石で作られた道具なのである。また、移動生活をしてきたために、発見の機会も少ないと考えられている。

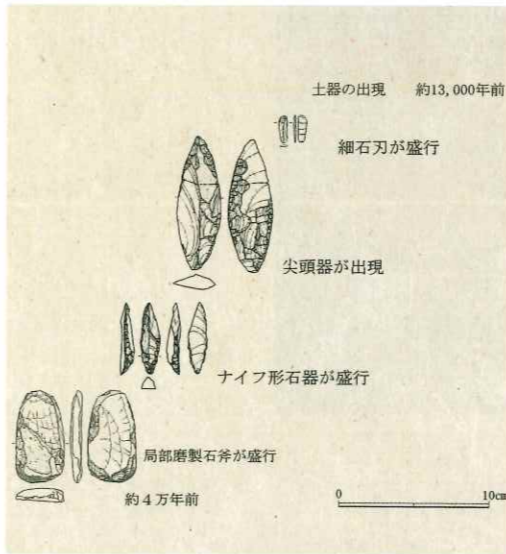


ナウマンゾウの白歯化石（福島県立博物館所蔵）

## 三 石器研究の進展

旧石器時代は、研究材料のほとんどが石器である。同じ形状の石器を分別することで、当時の人々の使用目的によって原石を打ち欠いて決まった形に作っていたことがわかり、石器の種類が見極められるようになってきた。また、遺跡から出土する剥片を接合することで、どのような石をどのように打ち欠いて最終的な石器が出来上がるのかを明らかにするなどして、石器を作る技術の研究も進められてきた。

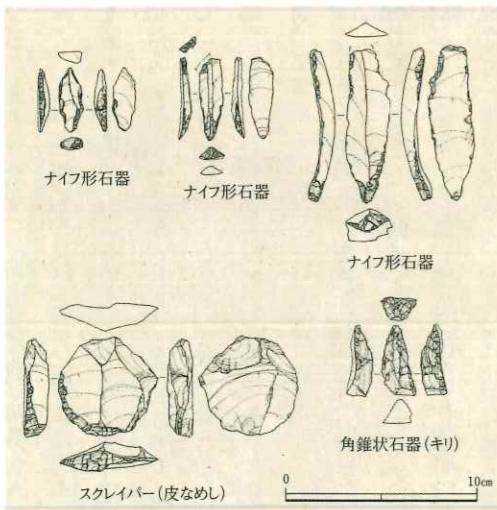
これらの研究で、現在までに日本列島で確認されている旧石器は、後期旧石器時代と呼ばれている時代に属し、初めの頃には、部分的に磨かれた石斧（局部磨製石斧）や台形の石器が主流で、次に切る道具のナイフ形石器が多く使われた時期、



後期旧石器時代の石器の変化

## 五 旧石器時代の生活

旧石器時代には、まだ土器が発明されていないので、煮て食べることはできなかった。しかしながら、たとえば喜多方市（旧・高郷村）塩坪遺跡では、焼けた自然石が集まった礫群が発見されている。石は細かくはじけたり、くすんだ色をしていて、熱を受けたものである。これは、後期旧石器時代の遺跡ではしばしば見られる遺構で、石を熱して水を沸騰させて料理する、蒸し焼きをした痕跡と考えられている。また、近年の発見では、動物を捕獲するときに利用する落とし穴などもある。仙台市富沢遺跡では、約二万年前の樹木が発見され、焚き火の跡や石器もまともに出てきた。現在は草原に針葉樹がまばらに生えていた当時の姿が復元されている。



弥明遺跡の石器  
（福島県教育委員会1992『弥明遺跡』より）

## 六 郡山の旧石器人

郡山市域の旧石器時代遺跡から出土する石器は、田村町宮田A遺跡・同じく田村町の正直C遺跡、西ノ内の郡山館遺跡・安積町の荒井猫田遺跡・熱海町の熱海遺跡など、主に石器を作るための元になった石で、しかも一点ないし二点の出土が多い。そのような中で、田村町守山の弥明遺跡では、複数の石器がまともに出てきた。出土した石器はすべて頁岩製で、ナイフ形石器が三点・穴を開けるのに使われた角錐状石器が一点・動物の皮から肉を掻き取ったり、なめしたりするのに使用されたと考えられる、円形のエンドスクレイパーが一点などであり、約二万年前の石器と考えられている。切る、削る、穴を開けるなど、石器が多く道具に分かれた、後期旧石器時代後半の特徴をもった資料である。また、複数の石器が一所で出土したことから、この遺跡が他の遺跡と異なるのは、たまたま石器の材料が持ち込まれたのではなく、動物などの捕獲と加工そして、ある程度の滞在が考えられる遺跡であることである。

このような石器を携えて、郡山に住んだ旧石器人も季節に応じた食料を求め、植物を採集したり動物を捕ったりしながら移動生活をしていただろう。

（柳沼 賢治）

次の時代を画するナイフ形石器は、剥片の鋭い縁を一部残し、基部あるいは側縁に急角度の加工をした石器で、文字どおり、切ったりあるいは刺したりする道具と思われる。

尖頭器は、木の葉のような形に加工された石器で、突き刺したり切ったりする道具と考えられている。

尖頭器と呼ばれる槍先が加わる時期、木や骨に装着して使用された細石刃が主流となる時期を経て、土器が出現する縄文時代に移っていくという過程が明らかになっている。

## 四 石器の種類

日本における後期旧石器時代の幕を開けた時期に特徴的な石器として、台形やペンの先のように加工された小型の石器と局部磨製石斧がある。前者は、突き刺す、切るための石器と考えられている。後者は、当初は木材の伐採・加工などに使用され、摩耗すると研ぎ直すのだが、研ぎ直しにより石器自体がだんだん小型になるため、そうなったものは、皮なめしなどの作業用に転化したのではないかと推定されている。この局部磨製石斧は、後期旧石器時代の後半には突然姿を消す道具で、これは木材の伐採がなくなったことを表し、謎とされる。ただし、東北では、後期旧石器時代の終わり頃にも使われていたようだ。